

# 学校でのいじめ被害経験と 成人後に相談相手がいないこととの関連

ヒラミツ ヨシミチ  
平光 良充\*

**目的** 学校でのいじめ被害経験は、成人後の抑うつ、自殺念慮、自殺未遂のリスクを上昇させることが報告されている。自殺対策としては悩んだときに相談することが重要である。本研究の目的は、学校でのいじめ被害経験と成人後に相談相手がいないこととの関連を悩み別に把握することである。

**方法** 東京大学社会科学研究所が2007年に実施した若年・壮年パネル調査の回答データを使用して二次分析を行った。分析対象者数は20～40歳の男女4,003人である。相談相手の有無を目的変数、学校でのいじめ被害経験の有無を説明変数とした二項ロジスティック回帰分析により、「仕事・勉強の悩み」「求職の悩み」「人間関係の悩み」「金銭面の悩み」の各悩み別にオッズ比を算出した。調整変数は性別、年齢階級、婚姻状態、就業状態、教育歴、精神的健康状態とした。

**結果** 分析対象者のうち、学校でのいじめ被害経験がある者は907人（22.7%）であった。「人間関係の悩み」では、いじめ被害経験と成人後に相談相手がいないこととに有意な関連がみられた（調整オッズ比1.42（95%信頼区間：1.10-1.82））。その他の悩みでは有意な関連はみられなかった。

**結論** 学校でのいじめ被害経験がある者は、成人後に「人間関係の悩み」を抱えた際に相談できる人がいないリスクが高いことが示唆された。今後は、学校でのいじめ被害経験者が成人後に相談相手がおらずに孤立しないように、長期的視点での支援方法を検討する必要がある。

**キーワード** 学校でのいじめ被害経験、成人後、悩み、相談相手、オッズ比、長期的視点

## I 緒 言

学校でのいじめは、被害児童・生徒の精神面に悪影響を及ぼし、最悪の場合は自殺を招くことがある<sup>1)</sup>。さらに近年の研究では、学校でのいじめ被害経験（以下、いじめ被害経験）は、成人後の抑うつ、自殺念慮、自殺未遂のリスクを上昇させることが報告されている<sup>2)-5)</sup>。したがって、自殺対策においては、いじめ被害経験は将来の自殺に大きく影響する遠位要因として捉えることも重要である<sup>6)</sup>。

自殺対策としては、悩みを抱いた際に相談することが重要とされる<sup>7)</sup>。しかし、わが国において、いじめ被害経験と成人後に相談相手がいないこととの関連を検討した研究は少ない。内閣府<sup>8)</sup>は、20～59歳を対象に調査を行い、いじめ被害経験がある者は、心理的サポート（相談、愚痴を聞いてもらうなど）の受領において社会的孤立者の割合が高いことを報告しているが、同報告では性別・年齢など交絡因子の影響が考慮されていない。また、三谷<sup>9)</sup>は、20～79歳を対象に調査を行い、性別・年齢の影響を考慮した場合でも、中学・高校時代にいじめ被害経験がある者は、相談相手がいないリスクが高いこ

\*名古屋市衛生研究所主任研究員

とを報告しているが、同報告ではどのような悩みを抱いた場合に相談相手がいないのかは検討されていない。

いじめ防止対策推進法（2013年9月施行）では、学校に対していじめの発生防止および被害者支援が義務づけられている。いじめ被害者が将来どのような悩みを抱えた際に相談相手がいないリスクが高いのかを知ることは意義があると考えられる。そこで、本研究は、いじめ被害経験と成人後に相談相手がいないこととの関連を悩み別に把握することを目的とした。

## Ⅱ 研究方法

### (1) 対象

東京大学社会科学研究所が実施した若年パネル調査wave1（以下、JLPS-Y）<sup>10</sup>および壮年パネル調査wave1（以下、JLPS-M）<sup>11</sup>の回答データを使用して二次分析を行った。JLPS-Yは2006年12月末現在で20～34歳を、JLPS-Mは35～40歳を対象とした調査であるが、両調査（以下、JLPS-Y・M）の質問項目と調査期間は同一である。JLPS-Y・Mは日本国内に居住する男女から住民基本台帳を基に、居住地と性、年齢により層化二段無作為抽出された13,320人（JLPS-Y：9,771人、JLPS-M：3,549人）を対象に実施された。調査期間は2007年1月～4月である。調査票は郵送で配付され、訪問回収された。有効回収数は4,800人（回収割合36.0%）（JLPS-Y：3,367人（34.5%）、JLPS-M：1,433人（40.4%））であった。本研究では、いじめ被害経験が過去の出来事であることを明確にするため、在学中の416人を分析から除外した。さらに後述する分析項目に欠損がない4,003人（有効回収割合30.1%）を最終的な分析対象とした。

### (2) 使用した変数

#### 1) いじめ被害経験の有無

JLPS-Y・Mは、過去の経験を「あなたは今までに以下のような出来事を経験したことがあ

りますか」と尋ねており、「親の失業」「自身の失業」「自身の離婚」など15項目の中から複数選択式で回答を得ている。本研究では「自分が学校でいじめを受けた」を選択した者をいじめ被害経験あり、選択しなかった者を経験なしと定義した。

#### 2) 相談相手の有無

相談相手の有無は「あなたは、次のA～Dについて相談するとき、どのような方になさいますか」という問いに対し、「A. 自分の仕事や勉強のこと（以下、仕事・勉強の悩み）」「B. 仕事を紹介してもらうこと（以下、求職の悩み）」「C. 友だち・恋人・配偶者などとの人間関係のこと（以下、人間関係の悩み）」「D. 失業や病気でお金が必要になったとき、まとまった金額を貸してもらうこと（以下、金銭面の悩み）」の4つの悩みを挙げ、各悩みについて親、配偶者または恋人、子ども、兄弟姉妹、その他の親戚、仕事関係の友人・知人、学生時代の友人・知人、その他の友人・知人、誰もいない、の中から複数選択式で回答を得ていた。本研究では、上記A～Dの各悩みについて「誰もいない」を選択した者を相談相手が「いない」、それ以外の選択肢を選んだ者を相談相手が「いる」と定義した。

#### 3) 調整変数

先行研究<sup>5)9)</sup>を参考に、調整変数として性別（男性、女性）、年齢階級（20～24歳、25～29歳、30～34歳、35～40歳）、婚姻状態（有配偶、無配偶）、就業状態（有職、無職）、教育歴（大卒以上、大卒未満）、精神的健康状態を使用した。JLPS-Y・Mでは、精神的健康状態の把握にfive-item Mental Health Inventory (MHI-5)<sup>12)13)</sup>が使用されていた。MHI-5は5項目で構成される自記式尺度で、0～100点の範囲を取り、低得点ほど精神的健康状態が悪いと解釈される。本来のMHI-5は6件法であるが、JLPS-Y・Mでは5件法が使用されていた。5件法版MHI-5は6件法版と同等のスクリーニング能力があることは確認されている<sup>14)</sup>。

(3) 統計解析

相談相手の有無を目的変数（いる = 0，いない = 1），いじめ被害経験の有無を説明変数（なし = 0，あり = 1）とした二項ロジスティック回帰分析により，前述A～Dの悩み別にオッズ比を算出した。オッズ比は性別，年齢階級，婚姻状態，就業状態，教育歴，MHI-5による調整を行った。MHI-5は連続変数，その他の調整変数はダミー変数として投入した。

表1 分析対象者の概要

(単位 人, ( ) 内%)

|                                    | 全体<br>(n = 4,003) | 学校でのいじめ被害経験     |                   |
|------------------------------------|-------------------|-----------------|-------------------|
|                                    |                   | あり<br>(n = 907) | なし<br>(n = 3,096) |
| 悩み別相談相手の有無                         |                   |                 |                   |
| 仕事・勉強の悩み                           |                   |                 |                   |
| いる                                 | 3 790(94.7)       | 848(93.5)       | 2 942(95.0)       |
| いない                                | 213( 5.3)         | 59( 6.5)        | 154( 5.0)         |
| 求職の悩み                              |                   |                 |                   |
| いる                                 | 2 531(63.2)       | 550(60.6)       | 1 981(64.0)       |
| いない                                | 1 472(36.8)       | 357(39.4)       | 1 115(36.0)       |
| 人間関係の悩み                            |                   |                 |                   |
| いる                                 | 3 612(90.2)       | 796(87.8)       | 2 816(91.0)       |
| いない                                | 391( 9.8)         | 111(12.2)       | 280( 9.0)         |
| 金銭面の悩み                             |                   |                 |                   |
| いる                                 | 3 497(87.4)       | 770(84.9)       | 2 727(88.1)       |
| いない                                | 506(12.6)         | 137(15.1)       | 369(11.9)         |
| 性別                                 |                   |                 |                   |
| 男性                                 | 1 940(48.5)       | 355(39.1)       | 1 585(51.2)       |
| 女性                                 | 2 063(51.5)       | 552(60.9)       | 1 511(48.8)       |
| 年齢階級                               |                   |                 |                   |
| 20～24歳                             | 543(13.6)         | 131(14.4)       | 412(13.3)         |
| 25～29                              | 928(23.2)         | 218(24.0)       | 710(22.9)         |
| 30～34                              | 1 231(30.8)       | 284(31.3)       | 947(30.6)         |
| 35～40                              | 1 301(32.5)       | 274(30.2)       | 1 027(33.2)       |
| 婚姻状態                               |                   |                 |                   |
| 有配偶                                | 2 041(51.0)       | 399(44.0)       | 1 642(53.0)       |
| 無配偶                                | 1 962(49.0)       | 508(56.0)       | 1 454(47.0)       |
| 就業状態                               |                   |                 |                   |
| 有職                                 | 3 326(83.1)       | 706(77.8)       | 2 620(84.6)       |
| 無職                                 | 677(16.9)         | 201(22.2)       | 476(15.4)         |
| 教育歴                                |                   |                 |                   |
| 大学以上                               | 1 335(33.3)       | 277(30.5)       | 1 058(34.2)       |
| 大卒未満                               | 2 668(66.7)       | 630(69.5)       | 2 038(65.8)       |
| 精神的健康状態 (MHI-5) (中央値 (25%点, 75%点)) | 65(50.75)         | 60(45.70)       | 65(55.75)         |

注 MHI-5は5項目で構成される自記式尺度で，0～100点の範囲を取り，低得点ほど精神的健康状態が悪いと解釈される。

表2 学校でのいじめ被害経験と成人後に相談相手がいなかったこととの関連

|          | 調整なしモデル                          |       | 調整ありモデル <sup>2)</sup>             |       |
|----------|----------------------------------|-------|-----------------------------------|-------|
|          | 粗オッズ比<br>(95%信頼区間) <sup>1)</sup> | P値    | 調整オッズ比<br>(95%信頼区間) <sup>1)</sup> | P値    |
| 仕事・勉強の悩み | 1.33(0.98-1.81)                  | 0.07  | 1.15(0.82-1.59)                   | 0.42  |
| 求職の悩み    | 1.15(0.99-1.34)                  | 0.07  | 1.04(0.89-1.21)                   | 0.66  |
| 人間関係の悩み  | 1.40(1.11-1.77)                  | <0.01 | 1.42(1.10-1.82)                   | <0.01 |
| 金銭面の悩み   | 1.31(1.06-1.63)                  | 0.01  | 1.21(0.97-1.51)                   | 0.09  |

注 1) 基準カテゴリーは，いじめ被害経験なし。

2) 性別，年齢階級，婚姻状態，就業状態，教育歴，精神的健康状態を調整変数として使用した。

統計解析にはSPSS Statistics 26を使用し，有意水準は5%とした。

(4) 倫理的配慮

本研究は，他機関が保有する既存の匿名資料を使用した二次分析である。JLPS-Y・Mへの協力は回答者の自由意思に基づいている。本研究は，名古屋市衛生研究所等疫学倫理審査委員会の承認を得ている（2020年9月3日承認，受付番号29）。

Ⅲ 研究結果

(1) 分析対象者の概要

分析対象者の概要を表1に示す。いじめ被害経験者は907人（22.7%）であった。年齢階級別のいじめ被害経験者の割合では，20～24歳が24.1%，25～29歳が23.5%，30～34歳が23.1%，35～40歳が21.1%であった。相談相手がいなかった人の割合は，「仕事・勉強の悩み」が213人（5.3%），「求職の悩み」が1,472人（36.8%），「人間関係の悩み」が391人（9.8%），「金銭面の悩み」が506人（12.6%）であった。

(2) いじめ被害経験と成人後に相談相手がいなかったこととの関連

いじめ被害経験と成人後に相談相手がいなかったこととの関連について悩み別に二項ロジスティック回帰分析を行った結果を表2に示す。調整オッズ比は，「人間関係の悩み」のみで有意な関連がみられた（調整オッズ比1.42（95%信頼区間：1.10-1.82））。一方で，「仕事・勉強の悩み」「求職の悩み」「金銭面の悩み」では有意な関連がみられなかった。

Ⅳ 考察

本研究のいじめ被害経験者の割合は22.7%であった。内閣府<sup>15)</sup>は，13～29歳を対象に調査を行い，自己申告に基づくいじめ被害経験者の割合は20～24歳が19.2%，25～29歳が23.0%であったと報告している。本

研究のいじめ被害経験者の割合は20～24歳が24.1%、25～29歳が23.5%であり、内閣府の報告と同程度であった。したがって、本研究の対象集団におけるいじめ被害経験者の割合は一般集団から大きく懸け離れてはいないと考えられる。

いじめ被害経験と成人後に相談相手がいないこととの関連について悩み別に検討したところ、いじめ被害経験者は、非経験者と比べて、成人後に「人間関係の悩み」を抱えた際に相談相手がいないリスクが高いことが示唆された。亀田ら<sup>16)</sup>は、大学生を対象に面接調査を行い、過去にいじめ被害経験によって人間不信になった事例を紹介している。また、金子<sup>17)</sup>は、大学生を対象に、過去にいじめ被害経験と現在の援助要請との関連を検討し、いじめ被害経験によって「自分を支えてくれる人はいないと思うようになった」「誰にも親しみの感情がわかなくなった」などの情緒的不適応傾向が強い者ほど援助要請を回避する傾向があることを報告している。本研究結果から、いじめ被害経験者の人間不信や援助要請回避傾向は成人後も続いている可能性が考えられる。さらに、Takizawaら<sup>2)</sup>は、小児期にいじめ被害を経験した者は、50歳時点で友人と会う機会が少ない傾向にあることを報告している。いじめ被害経験者の希薄な交友関係が相談相手がいないことに影響している可能性も考えられる。今後は、いじめ被害経験者が「人間関係の悩み」を抱えた際に相談相手がいない理由やその対策法について検討する必要がある。

内閣府の調査<sup>8)</sup>は、いじめ被害経験者は道具的サポート（お金の援助、看病・介護、災害時の手助けなど）の受領において社会的孤立者の割合が高いことを報告している。一方、本研究では「金銭面の悩み」で有意な関連がみられず、内閣府の調査とは異なる結果であった。内閣府の調査は、本研究とは対象者の年齢層が異なり、さらに性別、年齢階級など交絡因子の影響が考慮されていないために結果に相違が生じた可能性が考えられる。しかし、「金銭面の悩み」については、本研究でも調整オッズ比の点推定値

が1を上回っていたため、今後のさらなる検証が必要と考えられる

本研究の限界は主に2点ある。まず1点目に、本研究ではいじめ被害経験を回答者の記憶に基づいて把握しているため、思い出しバイアスが結果に影響を与えた可能性がある。今後は、いじめ被害経験を客観的に把握することが課題である。2点目に、本研究ではいじめ被害経験の有無のみに着目したが、いじめ被害経験の時期、期間、内容によって成人後の相談相手の有無に与える影響が異なる可能性が考えられる。今後は、いじめ被害経験の詳細な状況も加味して研究を行うことが必要である。このような限界はあるものの、いじめ被害経験者は成人後に「人間関係の悩み」を抱えた際に相談相手がいないリスクが高いことを示した点で、本研究は意義があると考えられる。

## V 結 語

いじめ被害経験者は、性別、年齢階級、婚姻状態、就労状態、教育歴、精神的健康状態の影響を除いた場合でも、成人後に「人間関係の悩み」を抱えた場合に相談できる人がおらず、孤立しやすいことが示唆された。今後は、いじめ被害経験者が成人後に「人間関係の悩み」を抱いた際に相談相手がおらずに孤立しないように、長期的視点での支援方法を検討する必要がある。

本研究を実施するに当たり、東京大学社会科学研究所附属社会調査・データアーカイブ研究センターSSJデータアーカイブから「東大社研・若年パネル調査（JLPS-Y）wave1, 2007（version 1.0）」および「東大社研・壮年パネル調査（JLPS-M）wave1, 2007（version 1.0）」（東京大学社会科学研究所パネル調査プロジェクト）の個票データの提供を受けた。本研究に関して開示すべき利益相反はない。

## 文 献

- 1) 池谷和子. 学校におけるいじめと法. 現代社会研究 2014; 12: 83-92.

- 2) Takizawa R, Maughan B, Arseneault L. Adult health outcomes of childhood bullying victimization : evidence from a five-decade longitudinal British birth cohort. *Am J Psychiatry* 2014 ; 171 ( 7 ) : 777-84.
- 3) Iwanaga M, Imamura K, Shimazu A, et al. The impact of being bullied at school on psychological distress and work engagement in a community sample of adult workers in Japan. *PLoS One* 2018 ; 13 ( 5 ) : e0197168.
- 4) Sigurdson JF, Undheim AM, Wallander JL, et al. The longitudinal association of being bullied and gender with suicide ideations, self-harm, and suicide attempts from adolescence to young adulthood : a cohort study. *Suicide Life Threat Behav* 2018 ; 48 ( 2 ) : 169-82.
- 5) Tachi S, Asamizu M, Uchida Y, et al. Victimization in childhood affects depression in adulthood via neuroticism : a path analysis study. *Neuropsychiatr Dis Treat* 2019 ; 15 : 2835-41.
- 6) 齊藤卓弥. 児童青年期における自殺対策のあり方. *精神科臨床Legato* 2017 ; 3 ( 4 ) : 188-92.
- 7) 自殺総合対策大綱 (2017年7月25日閣議決定) 2017.
- 8) e-Stat. 「絆」と社会サービスに関する調査 ([https://www.e-stat.go.jp/stat-search/files?page=1&layout=datalist&toukei=00100002&bunya\\_1=99&tstat=00001064687&cycle=0&tclass1val=0](https://www.e-stat.go.jp/stat-search/files?page=1&layout=datalist&toukei=00100002&bunya_1=99&tstat=00001064687&cycle=0&tclass1val=0)) 2021.3.17.
- 9) 三谷はるよ. 社会的孤立に対する子ども期の不利の影響 - 「不利の累積仮説」の検証. *福祉社会学研究* 2019 ; 16 : 179-99.
- 10) SSJDA Direct. 東大社研・若年パネル調査 (JLPS-Y) Wave1基本データ (<https://ssjda.iss.u-tokyo.ac.jp/Direct/gaiyo.php?eid=PY010>) 2021.3.17.
- 11) SSJDA Direct. 東大社研・壮年パネル調査 (JLPS-M) Wave1基本データ (<https://ssjda.iss.u-tokyo.ac.jp/Direct/gaiyo.php?eid=PM010>) 2021.3.17.
- 12) Berwick DM, Murphy JM, Goldman PA, et al. Performance of a five-item mental health screening test. *Med Care* 1991 ; 29 ( 2 ) : 169-76.
- 13) Yamazaki S, Fukuhara S, Green J. Usefulness of five-item and three-item mental health inventories to screen for depressive symptoms in the general population of Japan. *Health Qual Life Outcomes* 2005 ; 3 : 48, doi : 10.1186/1477-7525-3-48.
- 14) Rumpf HJ, Meyer C, Hapke U, et al. Screening for mental health : validity of the MHI-5 using DSM-IV Axis I psychiatric disorders as gold standard. *Psychiatry Res* 2001 ; 105 ( 3 ) : 243-53.
- 15) 内閣府. 子供・若者の意識に関する調査 (令和元年度). 2020.
- 16) 亀田秀子, 相良順子. 過去のいじめられた体験の影響と自己成長感をもたらす要因の検討 - いじめられた体験から自己成長感に至るプロセスの検討 -. *カウンセリング研究* 2011 ; 44 ( 4 ) : 277-87.
- 17) 金子功一. 過去のいじめ経験が大学生に及ぼす影響 - 当時のいじめ経験と現在の援助要請に着目して -. *植草学園大学研究紀要* 2018 ; 10 : 31-41.